

## 南宋花鳥画墨線の研究

石井 恭子

令和7年度の研究は、南宋時代花鳥画の模写を中心に据え、その制作過程の追体験と表現要素の分析、体系化を並行して進めた。

年度前半の4月から6月にかけては、主に上げ写しによる模写を行い、対象作品の基本的な線描構造の把握に努めた。この期間には、東京大学東洋文化研究所を訪問し、塚本鷹充氏の研究室において研究対象作品の高精細画像の提供を受けた。これらの画像をもとにデジタル処理を施すことで、肉眼では判別が困難な墨線や彩色層の分析を進めることが可能となり、模写精度の向上に大きく寄与した。

9月以降は、大竹卓民氏の研究会に参加し、模写方法を敷き写しへと移行した。墨線の再現性を高めつつ、月に1作品のペースで絹本への彩色模写を行い、制作プロセス全体の検証を進めた。

10月は「宋元仏画展」（京都国立博物館）の出品作品から、重要文化財銭選筆「牡丹図」の線描と彩色の関係について調査した。

また、12月には台湾に渡航し、国立故宮博物院において北宋・南宋時代の絵画を実見するとともに、現地の画材店にて工筆画用の筆を入手した。これにより、実作と模写双方の観点から、描画材料と表現の関係について理解を深めることができた。

12月から3月にかけては、模写制作で得た墨の表現を用い、日本画を制作し2つの公募展に3作品を応募した。

本年度は、国宝 伝 李安忠「鶉図」、重要文化財 伝 馬麟「梅花小禽図」、国宝 趙昌「林檎花図」、作者不詳「白頭叢竹図」、「枇杷綉眼図」、「秋樹鸚鵡図」、黄筌「蘋婆山鳥図」、徽宗「桃鳩図」、重要文化財 銭選「牡丹図」の計9作品を対象とし、そのうち6作品について彩色模写まで完成させた。研究当初は18点の作品を挙げていたが、作品1につき課題を設定して臨んだため、1年間で全て完了することはできなかった。しかしながら、これらの模写を通じて得られた最も重要な知見は、南宋花鳥画における表現が単一の様式に還元されるものではなく、作品ごとに異なる線描の選択と運用がなされている点である。従来、国宝「紅白芙蓉図」を基軸として理解していた線描観は、複数作品の比較と実践を通じて相対化され、墨線そのものが多様な性格を持つことが明らかとなった。

また、「紅白芙蓉図」にはなかった墨線と墨面（染、暈染）の表現に触れることで、

南宋花鳥画の色面の構成に新たな視点を設けることができた。さらに、本研究は当初「線」に着目して開始されたが、線の検討を進める中で、南宋花鳥画は鈎勒と没骨、黄氏体と徐氏体、彩色と水墨といった、相反する概念を単純に対立させるのではなく、一つの画面の中でそれらを併存させながら緊張感をもって成立している中国絵画の構造についての理解を深めた。

彩色模写の過程では、墨線のみならず暈染がモチーフの写生に不可欠な要素であることも確認された。とりわけ、墨や藍によってあらかじめ質感や量感を十分に構築した上に、ごく薄い岩絵具の層を重ねることで、高い発色と繊細な表現効果が得られる点は重要な発見であった。

画材の課題についても多くの示唆と課題があった。台湾では画材店や美術館でいくつかの筆を買った。絵絹については中国の絵絹を入手した。これらの画材は院体画の模写に適しており、絵画表現と画材の関係について考えさせられた。また、日本画の筆や日本画用の絵絹、絵具を使って、今後の自分がどのような絵画表現を模索していくのか考えるきっかけになった。

本研究は南宋時代の花鳥画を研究対象としたが、模写制作を重ねながら課題を発見し、次の模写作品を検討することで、五代十国・後蜀時代の黄筌に遡り、北宋、南宋を経て元時代の銭選まで辿ることで、広い視野から花鳥画の墨線が表現する様々な表情を捉えることができた。各時代から様々な中国絵画の影響を受けてきた伝統的な日本画を基盤として現代の作品を制作する私自身にとって、多くの示唆を得るものであった。

以上の成果を踏まえ、今後は墨線の研究を基盤としつつ、「線」と「面」の関係性に着目した分析へと発展させ、南宋花鳥画における写生表現の構造的理解をさらに深化させていきたい。

